

科学技術人材育成費補助金

テニユアトラック普及・定着事業

～若手研究者を育成するための自立した研究環境の整備を目指して～



文部科学省

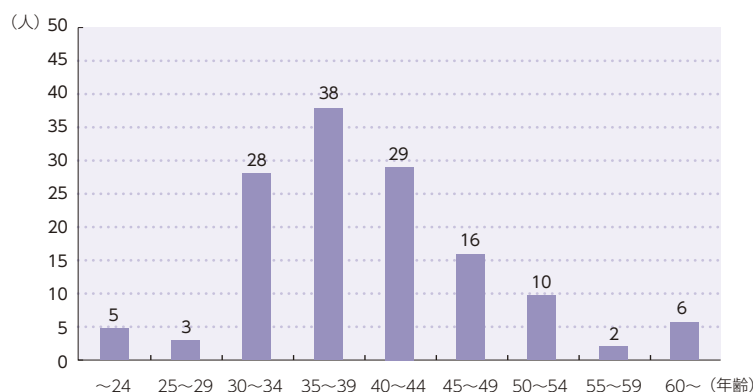
文部科学省 科学技術・学術政策局
基盤政策課

なぜテニユアトラック制の普及を進めているのですか？

● 課題

- ・優れた研究成果を上げた研究者の多くは、若い時期に、その成果の基礎となる研究を行っています。ノーベル賞受賞のきっかけとなった論文の多くは、30代に発表されたものです。

図 ノーベル賞（化学賞、物理学賞、生理学・医学賞）受賞者の業績を上げた年齢の分布（1987～2006）



注) 業績を上げた年齢は、受賞のきっかけとなった論文等の発表時点である。
出典：文部科学省調べ

- ・しかし、我が国の若手研究者の多くは研究員や助教等の立場にあり、自立して活躍できる環境が十分に整備されていないことが指摘されています。
また近年、大学や独法研究機関の基盤的経費及び総人件費の削減等が進められた影響などにより、若手研究者の割合が減少する傾向もあって、若手研究者は将来展望を描きにくくなっていることも指摘されています。
- ・このため、優れた研究者を国内外から確保して養成するためには、自立して研究できる環境を与えることや、キャリアパスを見通すことができるように、任期終了後のポストを確保しておく仕組みが求められます。

● 文部科学省の取組

- ・文部科学省では、平成18年度から、研究者が若い時期に自立して研究できる環境を整備することを目的に、アメリカ等で定着しているテニユアトラック制を大学等へ導入するモデル事業^{*}を進めてきました。この結果、平成22年度までに40大学等がテニユアトラック制を導入し、各大学では様々な形のテニユアトラック制の試みが行われました。

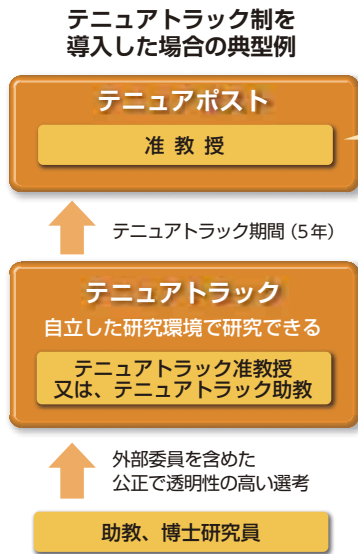
^{*}旧科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」

- ・平成23年からは、モデル事業の成果等を踏まえて、9頁で紹介する「テニユアトラック普及・定着事業」を開始し、補助対象となるテニユアトラック制の要件を新しく定めています。
- ・第4期科学技術基本計画（平成23年8月閣議決定）においても、以下のような数値目標が定められています。

第4期科学技術基本計画（平成23年8月閣議決定）

国は、テニユアトラック制の普及、定着を進める大学への支援を充実する。これにより、各大学が、その目的や特性に応じて、テニユアトラック制の導入を進めることにより、テニユアトラック制の教員の割合を、全大学の自然科学系の若手新規採用教員総数の3割相当とすることを旨とする。

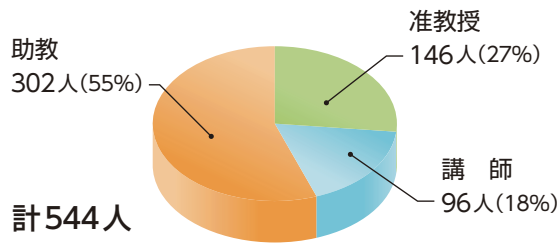
●大学における教員のキャリアパスのイメージ図



テニュアポストに移行した後、研究主宰者 (PI) としての環境が維持されていることが必要です。(教授への昇任は必須条件ではありません)

●採用したテニュアトラック教員の職位別分類

Q：テニュアトラック教員は、どのようなポストで採用されていますか？



(平成18年度～平成22年度採択機関)
旧科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」におけるJST集計データ (平成23年3月末)

テニュアトラック制のメリットは？

●大学・研究機関にとってのメリット(例)

- ・優秀な若手研究者が採用され、充実した自立的な研究環境と相まって優れた研究成果が上がっています。

例：多くの受賞実績

- ・科学技術分野の文部科学大臣表彰
- ・米国生理学会 Neural Control & Autonomic Regulation Section (NCAR) New Investigator Award
- ・材料科学に関する国際会議 (IUMRS-ICAM) Young Scientist Award など多数

- ・一般の若手教員に比べ科学研究費補助金の採択率が高くなっています。

	テニュアトラック教員	学内の一般教員
若手研究 (A・B、39歳以下) の採択率	73%	36.3%

※旧科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」平成20年度採択9機関における、平成20年度～21年度の科学研究費補助金の獲得状況から算出

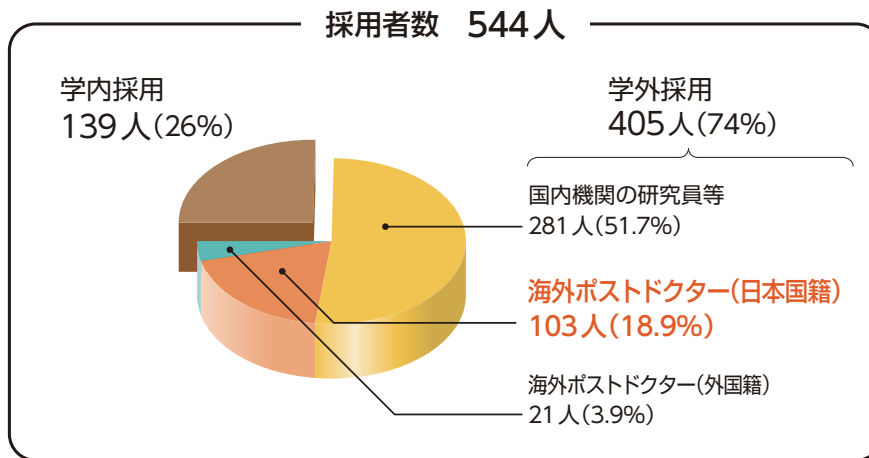
- ・大学にとっては、
 - ◇ 優秀な若手研究者を採用できる
 - ◇ 外部資金の獲得が増えることにより、間接経費等の収入が増えた …等の効果が出ています。

●テニュアトラック教員にとってのメリット(例)

- ・優れた実績を残せば安定的な職が得られる
- ・十分な研究費が配分されて、自立した研究環境の中で自分の研究に取り組める
- ・研究以外の業務が軽減されて十分な研究時間が確保できる

● 海外にいる日本人若手研究者が国内で活躍するポストの一つにもなっています

・ テニユアトラック教員として採用される前の所属機関の内訳



(平成18年度～平成22年度採択機関)
旧科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」におけるJST集計データ(平成23年3月末)

東京農工大学から声をいただきました。(平成18～22年度 全国シンポジウム主催大学)

テニユアトラック制を導入したメリットは、良い人材を採用できたことに尽きると思います。

本学に採用したテニユアトラック教員へのインタビューなどから、チャレンジングで優秀な若手研究者は、自立的な研究環境に対して強い魅力を持っていることが分かりました。

研究主宰者(Principal Investigator ; PI)として、研究資金や研究スペースの配分、管理運営業務の軽減というアドバンテージを受けられるテニユアトラック制は、これからも優秀な若手研究者を集めるために有効に働くと感じています。

また、優秀な人材を獲得できたことの波及効果として、より多くの外部資金の獲得ができるようになりました。

